

ふる里の話題

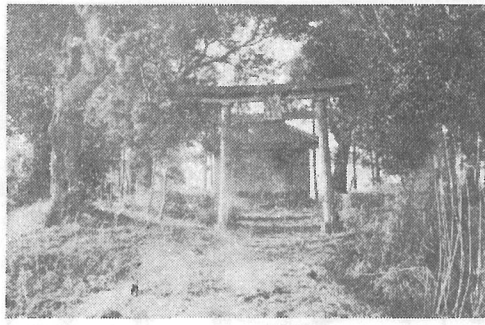
両国稲荷霊験記

上総国古川の郷の長である久平は、目の前に溝々と続いて湖のように両国田圃を埋めつくした洪水の水面を眺めていた。

仁和三年の秋、九月も半ば近く二百十日も無事にすぎ、それに今年も、両国新田の郷と一緒に祭っている稲荷の社に、京都御室の御所から、正一位稲荷大明神の称号を允許するといふ宇多法皇の綸旨が、近く等、収穫の秋を前に両部落の人々は、楽しい秋祭りを夢に画いていた。ところが、九月五日から降り始めた雨は終日豪雨となり、重陽の節句を祝う九日にはとうとう栗山川が溢れ出し、両国新田と古

川の大半は田畑も家も洪水の中に浮いてしまったのだ。両部落で交替に行なっている稲荷の祭主は、丁度今年古川の番になっていたが、御所からのお達しでは「綸旨の書状は、社の在す部落の長の家に於いて」というので、両国新田の長仁平の屋敷で行なわれ、まだそのまま奉安されている筈である。

綸旨拝受についで「年番の古川の長が代表となるべし」と主張する部落民をよくやく押し止めたが、久平自身も「社の鎮座する部落とは、古川と両国の双方を指すものではなかつたか」「当然今年」の当番に譲ってよかつたのに」という



霊験あらたかな両国新田のお稲荷さん

「当然今年」の当番に譲ってよかつたのに」という

「若しや、綸旨の書状では？」と改めると紫の袷紗に包まれているのは、まぎれもなく御室の御所から拝受した綸旨の書状であった。「そうか、あの仁平の森の辺りで右往左往している舟はそれを探しているのか、ここからは声も届くまい」と思案しながら気がつく、古川の郷の人々が五、六人久平を囲むように立っていた。

「久平旦那、それをどうしなされる。神様はやっぱり年番を御存知なんだ」「古川に流れついたらんだ。おいらがお預りするのよかっぺ」と、折角こちらに流れついたら綸旨は両国新田に渡すことばなんねえという気持が誰の顔にも読みとれた。その上「年番でない両国新田で綸旨を受けたから天罰で洪水になったのだ」とさえ言い出す始末なのである。それに押問答を繰返すうちにいつの間にか足元も暗くなり、どうやら仁平宅の小舟も引上げたらしいので「先ずは」と久平宅の神棚に綸旨の書状を奉安し、御神灯等を供えて祀った……やがて、夜も更けて灯明を消し、久平が寝に着こうとすると、何か神棚の辺りが急に明るくなり、しかもその光りは

正一位の称号允許の綸旨

布団の中までも通り、眠ることもできない有様である。「これはどうしたことか」とその室を覗いて見ると、神棚の辺りが燦然と輝き、その光りは綸旨の函からであることはまぎれもなかつた。「これは両国の仁平に渡すべき綸旨の書状を古川に止め置くためである。あま勿体ない」と夜中にかかわらず、作男数名を伴ない、浅間の丘に避難している両国の仁平の許に届けたのである。次第によつては首をつる始末」と案じていた両国の仁平の喜びは勿論「こんな霊験あらたかな社を共有する幸を」と二人とも喜び合ひ、お互いが洪水の後始末に精進をして洪水の引くのを待ち、質素ながらも和気藹々の中に綸旨奉納の儀

の母屋は、土台を洪水にさらわれて水に浸ってしまったというのである。

そう言えば、見慣れた仁平の屋敷は黒々とした森だけが水に影を写し、家らしきものは姿を見せていなかった。そして他の人々が家財道具とともに石合山や、浅間の丘に避難して人っ子一人いない両国新田の中で、仁平の屋敷の辺りには小舟が二、三隻何かあつた。わたしに往來していた。「行方不明でもあったのか」「洪水の直後、救援に行つた時は『全員無事』と聞いた筈だが』等と考えながら、ふと足元を見ると、黒塗に唐

式をかねた秋祭りも済ませなり、今でも両国田圃は多古米大総米に劣らない好評を取りつづけている。その稲荷神社も全じ場所に鎮座して古川、両国の両部落の幸を静かに見守っている。(此の霊験記は旧横芝町誌から取材したものである)

新年賀謹

横芝町農業委員会

- 会長 伊藤 桜
- 副会長 川島 敏
- 委員 市原 文次
- 委員 八角 喜久夫
- 委員 大沢 丈夫
- 委員 伊藤 勝也
- 委員 怒賀 源也
- 委員 鈴木 寛
- 委員 伊藤 文雄
- 委員 伊藤 辰夫
- 委員 斎藤 武
- 委員 鈴木 元
- 委員 伊藤 栄一
- 委員 若梅 光儀